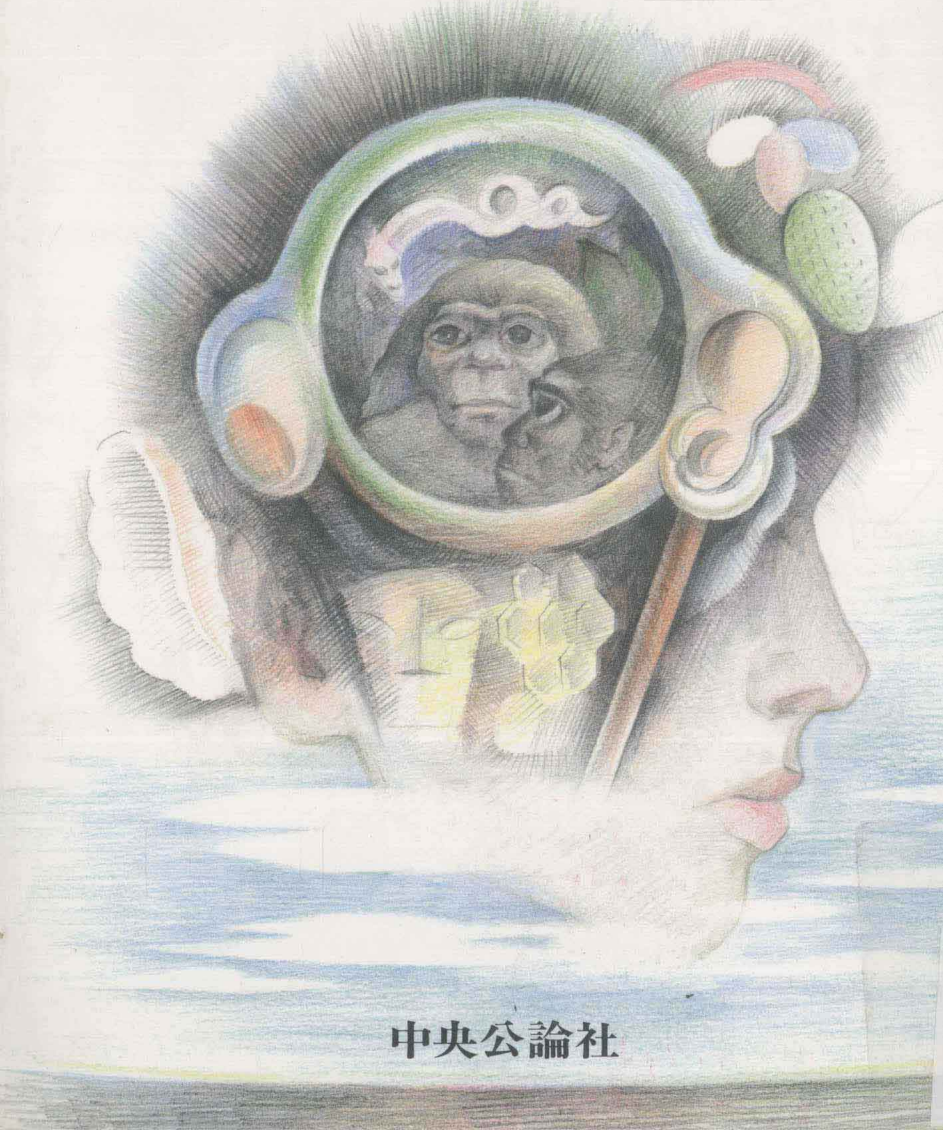
後継者たち

ウィリアム・ゴールディング

小川和夫訳



中央公論社

後継者たち

ウィリアム・ゴールディング
小川和夫訳

中央公論社

ウィリアム・ゴールディング
後継者たち
©1983　定価880円
昭和58年11月5日印刷　昭和58年11月15日発行　検印廃止
訳者　小川和夫　発行者　高梨　茂　印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替東京2-34
ISBN4-12-001248-4

後継者たち

カバー画・装幀　十時孝好

本文挿画　アントニオ・ディアス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

……われわれはネアンデルタール人の外見については知るところまことに少ないが、それでも……非常に毛深く、醜かった、つまり、低い額や突き出た眉毛や類人猿のような頸や背丈の矮小さにくわえて、外見全体に嫌悪すべき異様さがあった、と推測しうると思われる。……サー・ハリー・ジョンストンはその著『考察と評論』中の現今の人類の起源についての概観で、つぎのように述べている、「狡猾な頭脳、不器用な歩きかた、毛深い身体、強い歯、それにおそらくは持っていた食人的性向、このようなものを備えたゴリラにも似た怪物にたいする漠とした種族的記憶が、民間伝承における人食い鬼の起源となったのであろう……」

H・G・ウェルズ『世界史概観』

一

ロクはできるだけはやく走っていた。頭をさげ、茨の木を水平に握ってバランスをとり、空いた手で盛りあがっている木の芽の流れを左右に払いのけてゆくのであった。リクウは彼に馬乗りになり大声あげて笑っていたが、片方の手はロクの頸筋から背骨にかけておおっている栗毛の捲毛のなかに食い入り、他方の手でその顎下に押しこんだ小さいオア（オアとい う神の像）を抱えているのだった。ロクの脚は器用だった。眼があって見るようである。ぶなの根が張りだしていると横っとびに跳んで避け、小道に水たまりがあると跳びこえる。リクウは足でその腹を打った。

「もっとはやく！　もっとはやく！」

足が刺し傷で痛むころ、彼は道からそれ、歩調をゆるめた。ここまで来ると左の側に平行に走っている川の瀬音は聞こえるが、その姿は見えない。やがてぶなの林が開け、藪がなくなって、彼らは平坦な小さな泥地に出た、そこに目指す丸木があるはずだ。

「ついたぞ、リクウ」

縞瑪瑙色の沼地の水が眼の前にひろがっており、幅をしだいにひろげて川になっているのだった。川に沿った小道は対岸の地にふたたび始まり、高まっていって林のなかに姿を消していた。ロクは、満足げに歯をむきだして笑い、水際にむかって二足歩くと、足を止めた。笑いは消え去り、下唇が垂れさがるほど口をあんぐり開いた。リクウはその膝をつたってすべり落ち地に降り立った。彼女は小さいオアの頭をしゃぶりながら、彼方を眺めた。

ロクはあやふやなままに声をあげて笑った。

「丸木がなくなってるぞ」

彼は眼を閉じ顔をしかめて丸木を思い描いた。灰色で腐りかけているその丸木はこちら側から向う側へ行く水中にあったのである。その真ん中に足をかけて進むと、足の下には水が流れていると、場所によっては人の肩ほども深い恐ろしい水があると、おのずからに感じられたものだ。ここの水は川や滝のように目覚めてはいず眠っているのだが、この先で川にひろがり目を覚まして、右の側では越えがたい沼沢地、茂み、湿地の荒野に伸び広がっているのである。仲間がいつも使っている丸木がそこにあると確信しきっているものだから、彼はまた眼を開き、いままで夢を見ていたかのように微笑みかけた。が丸木は見えない。

小道を駆けてフェイがやって来た。その背中に赤ん坊が眠っている。落ちる心配はない、というのは赤ん坊の両手が彼女の髪を頸のところでつかみ、その足が背中のずっと下のところで髪をつかまえているのが分かっているからだが、それでも目を覚ましてはいけないとそっと駆けてくるのだった。ぶなの木の下に彼女の姿が見える前にロクは彼女のやってくるのを聞きつけた。

「フェイ！　丸木がなくなっちゃった！」

彼女はまっすぐに水際までやってきて、眺め、嗅ぎ、それから咎めるようにロクの方にふりむいた。が、口を利くまでのことはなかった。ロクが頭を振ってみせはじめたからである。

「いや、違うよ。みんなを笑わそうと思っておれが丸木を動かしたんじゃない。なくなっちゃったんだ」

彼は腕をいっぱいにひろげて影も形もなくなったことを示し、相手が理解したと見てとると、腕をおろした。

リクウが彼を呼んだ。

「ぶらんぶらんさせて」

ぶなの枝が幹から長い首のように垂れさがってきて、光を見いだし、緑や茶の芽を一抱えつけたその首を上にさし伸ばしている、――彼女はその枝にのぼろうとしているのだった。ロクはなくなった丸木のことは棄ておいて少女を曲がりくねった枝の中にほうりこんだ。そして横に持ちあげ、引っぱり、一足ごとに少しずつ後ろにさがると、そのたびに枝は軋んだ。

「それっ！」

枝を離すと彼は尻もちをついた。枝は飛んでゆきリクウは嬉しそうに金切り声をたてた。

「だめよう！　だめだったら！」

だがロクはくりかえしくりかえし枝を引っ張り、一抱えの葉叢はリクウを、金切り声をたて笑い声をたて抗議させながら、水際を飛ばせるのだった。フェイは水からロクに、またその背後にと眼を移していた。彼女はまた顔をしかめていた。

ヘイが小道をやって来た。急いでいるが走ってはいない、ロクよりも思慮深くて、危急の場合にはもってこいの男である。フェイは大声で話しかけたが相手はすぐには返事をせず、丸木のなくなった水に眼をやり、左の方に場所を移した、そこからだとぶなの木のアーチごしに川が見えるのである。それから侵入者がいはしないかと耳と鼻で森を探り、安全が確かめられるとはじめてこの男は茨の木をおろし水際にひざまずいた。

「見ろ！」

指でさし示されてみると水底に筋目が見えて丸木が動いた跡だとわかる。その縁はまだ際だっており、えぐりとられた土塊が筋目のなかに残っていて、まだまわりの

水で崩されていない。彼は湾曲した筋目をたどって水中に踏みこみ、それをおぼろに見えなくなるところまで追っていった。フェイは対岸に眼をやって、水で断たれた小道がまた始まる地点を眺めた。丸木の他の端が据えられていた場所の土がかき乱されている。彼女がヘイに訊くと、手真似でなしに口で答えた。

「一日。たぶん二日さ。三日じゃない」

リクウはまだ笑い声とともに金切り声をたてていた。ニルが小道をやってくるのが見えた。疲れて空腹のときにはいつもそうだが、低く呻くような声を洩らしている。その重っ苦しい身体を包む肌はたるんでいるけれども、両の乳房は突き出て盛りあがり乳首に白い乳がにじんでいる。他の誰が腹をへらそうと、この女の赤ん坊は大丈夫だろう。彼女はその赤ん坊がフェイの髪につかまって眠っているのに眼をやってから、ヘイのところに歩みよってその腕にさわった。

「どうしてあたしをおいてったの？　おまえはロクよりもっと頭のなかに絵を持っているのに」

ヘイは水に指先を向けた。

「丸木を見にいそいで来たんだ」

「だって丸木はないじゃないか」

三人はたがいに顔を見あわせて立っていた。すると、この一族にはよくあることだが、おたがいの間に感じが通った。フェイとニルはヘイの考えの絵を分かち持ったのである。ヘイは丸木がまだどこかそのへんにあることを確かめねばならぬと考えたのだ、なぜかといえば水が丸木をさらっていったり、あるいは丸木が自分の用事で這い出して行ってしまったとすれば、一族の者たちは沼地をまわって一日の旅をしなければならず、それは危険も危険だが、今までと較べて不便さも一層だからだ。

ロクは枝に全身の重みをかけて、動かぬよう抑えた。そしてリクウに静かにしろと合図をすると、彼女は木から降りて来て彼の傍に立った。おばあさんが小道をやって来るのだ、その足音も呼吸の音も聞こえてくる。彼女は最後の木の幹をまわって姿を現わした。白毛だらけで小柄、それが前かがみになり、しなびた乳房の脇に両手で抱えている何か葉で包んだ荷物に眼をすえて、他のことには気もとめぬ態である。一族の者たちは一団となって黙って彼女を迎えた。彼女は口をきかず、へりくだって辛抱するといったさまで、事の成行を待っていた。ただ手に持った荷物が垂れさがって、また持ちあげられるので、人々はその重さのほどを思い浮かべるのであった。

ロクがはじめにしゃべった。彼はそこにいる者たち全体に話しかけ、笑いながら話したつもりであったが、自分の口から出る言葉は聞こえても笑い声は欠けているのだった。ニルはまたうめくような声をたてはじめた。

さて今度は一族の最後に残った者が小道をやってくるのが聞こえた。それはマルで、ゆっくりと時々咳をしながら歩いてくる。終りの木の幹をまわって、空地の入口で止まり、持ってきた茨の木の端にぐったりと倚りかかり、咳をしはじめた。前かがみになると、白毛の抜け落ちたあとが、眉毛のうしろから頭上を越して、両肩に伸びた毛の叢にいたるまで、一条の径をつくっているのが見えるのであった。一族の者たちは彼が咳をしているあいだは、じっと見つめている鹿のようにひっそり押し黙って待っていたが、その間にも彼らの足指のあいだから泥が四角の塊をなして盛りあがってきて、その丈が伸びると折れて足指をおおうのであった。太陽をかくしていた鋭い輪廓の雲が移り、木々は冷たい陽光を篩にかけて彼らの裸の肉体に浴びせかけた。

やがてマルの咳はとまった。彼は茨の木にぐいと身をもたせ、その杖をつかむ手のすべりを他方の手で交互に抑えるようにして、身体をまっすぐに保とうとしていた。彼は水に眼をやり、それから人々の一人ひとりに順々に眼をやった、彼らは待っていた。

「わしは絵を持っている」

彼は片方の手を離してそれを額にひらたく当てた、そのあたりにちらついている心象が逃げださないようにといった案配である。

「マルは年寄りではなくて母親の背中にしがみついているわ。ここに水がよけいあるばかりではなくて、わしらが通ってきた道にもあったわ。一人賢い人間がいてな。倒れている木を他の人間に持ってこさせて——」

眼窩に深く落ちこんだ彼の眼は人々に向けられ、自分の絵を分かち持ってくれと願っていた。彼は低く、また咳をした。老婆は注意ぶかく荷物を持ちあげた。

やがてヘイが口を切った。

「おれにはその絵が見えないがな」

老人は溜息をし頭から手をおろした。

「倒れている木を探せ」

命に従って人々は水際に散っていった。老婆は先ほどリクウがブランコにしていた枝に歩みより、荷物を支えている両手をその上に載せた。ヘイが最初に彼らに呼びかけた。で、彼らは彼の方に急いだが、踵に盛りあがってくるどろどろした泥にはたじろぐのであった。リクウは何かの木の実が黒ずんで、結実の時期からそのまま残っているのを発見した。マルが来て、丸木を見て顔をしかめた。樺の幹で、太さは人間の股ぐらいしかなく、そして泥と水になかば埋まっていた。そこここで樹皮がむけていて、ロクはそこから色のついた菌をむしりとりはじめた。菌のうちには食べられるのもあってロクはそういうのを選んでリクウにやった。ヘイとニルとフェイは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幹を引っぱろうとしたのだが、不器用でどうにもならない。マルはまた溜息をついた。
「まあ、待て。そこをヘイが。フェイはそこを。ニルも一緒に。ロク！」
丸木は造作なく上がってきた。まだ残っている枝があって、その重い木をあの暗い水峡まで持って帰る途中で、その枝が藪にからんだり、泥に引きずられたり、どうにも邪魔になった。太陽がまた姿を隠した。
水際まで来ると老人は対岸の掻き乱された土のあたりをにらんでいたが、
「丸木を泳がせるんだ」
これは微妙で困難なことだった。水に濡れた丸木をどう扱おうと、足を水につけないわけにはゆかないのである。でもとうとう丸木は浮き、ヘイは身を乗りだしてその一端をつかんだ。他の端は少し水に沈んでいる。ヘイは一方の手で支え他方の手で引っぱるようにした。と、幹の枝のついた頭のほうがゆっくり前方に動いて対岸の泥の上に止まった。ロクは、頭をのけぞらせ、感心しきって有頂天でしゃべりたてたが、言葉がただでたらめにロをついて出てくるだけであった。誰もロクのことなど気にせず、老人は顔をしかめて頭に両手を押し当てている。幹の他端はおそらく人間の身長の二倍ほどの長さが水中に没していて、それがまた幹のいちばん細い部分なのだ。ヘイがどうしようかというふうに老人を眺めると、こちらは頭をまた押えて咳をした。ヘイは溜息をし、用心ぶかく片足を水に踏み入れた。彼が何をしようとしているのかを見てとると人々は彼に心をあわせて呻き声をたてた。彼は念にも念を入れて水に入ってゆき、彼が顔をしかめると皆それにあわせて顔をしかめた。彼は喘ぎ、水が膝上までくるところまで踏みこみ、両手で幹の樹皮を皺むばかりにつかんだ。で次に一方の手で押しつけ他方の手で持ちあげた。幹はぐるりと廻り、大枝は黄褐色の泥を掻き乱し、泥は回転する木の葉の群とともに渦を描き、樹頭はかしいで岸のさらに奥の方に倚りかかった。彼は力をこめて押したが生いひろがった小枝のために動かばこそである。ずっと先の方で幹が曲がって水にもぐっているところがあって、そこにはまだ切れ目があるのだ。人々の真剣な注目を浴びて彼は水からあがってきた。マルはまた二本の手で茨の木を持ち、期待の眼をヘイに注いだ。ヘイは小道が空地に達するところに行き、自分の茨の木を拾いあげ、うずくまった。一瞬彼は前かがみになったが、身が倒れるより早く足が進み出、彼は空地をよぎって脱兎のごとくに駆けていた。丸木の上を走ったのは四歩だけで、足を落とすたびに膝で頭をつきあげるようにした、すると丸木は水を打ち、ヘイは脚を縮め両腕をひろげて、空中を飛んでいるのであった。彼は木

の葉と土の上にずしんと落ちた。越えたのである。後をふりかえって、幹の頭をつかんで引っぱりあげた。道は木をこえて連なったのである。

人々は安堵と喜びで大声をあげた。太陽はこの瞬間をえらんでまた姿を現わしたので全世界が彼らの愉しさを分かち持つように思われた。みんなヘイをほめそやして、てのひらで自分たちの股を叩き、ロクはみんなの得意な気持をリクウとともに分けあうのだった。

「ごらん、リクウ。幹は水に懸かったじゃないか。たくさん絵を持ってるなあ、ヘイは！」

一同がまた静かになるとマルはその茨の木をフェイに向けた。

「フェイと赤ん坊だ」

フェイは手で赤ん坊を探ってみた。頸筋で束になった髪に隠れて他の者からはほとんど見えないが、赤ん坊の手と足はそれぞれその場所の捲毛をしっかりとつかんでいた。フェイは水際に行き、両腕を左右にひろげ、手際よく幹の上を駆け抜け、最後の部分は跳んでヘイとならんで立った。赤ん坊は目を覚まして、彼女の肩ごしにちょいと顔をのぞかせたが、片足のつかむ箇所を変え、また眠りこんだ。

「つぎはニルだ」

ニルは顔をしかめた、眉の上に皮膚をひっぱり集めたのである。眉から捲毛をうしろに撫であげ、苦しそうに顔をしかめ丸木のところへ走っていった。両手を高く頭上にかかげ、まんなかに達したときには大声をあげていた。

「ああ、ああ、ああっ！」

丸木は撓い沈みはじめた。ニルはいちばん細い部分にさしかかり、盛りあがる乳房を躍らせて高く跳び、膝までつかる水のなかに落ちた。彼女は金切り声をあげ泥から足を引き抜き、ヘイが差しだした手をつかみ、そして喘ぎ戦きながら固い大地に立った。

マルは老婆に歩みよって穏やかに言った。

「越えてみるかね？」

老婆は内なる思いに相変わらず耽っていて、部分的に目覚めただけである。彼女は依然として両手の荷物を胸の高さに抱えたまま、水際まで降りて行った。彼女の肉体にあるものとては骨と皮膚とわずかばかりの白毛ぐらいのものであった。彼女がすばやく踏み越えて行ったとき幹は水中でほとんど揺らめきもしなかった。

マルはリクウに身をかがめた。

「越えるかな？」

リクウは小さいオアの頭をしゃぶっていた口を離し、その赤いもじゃもじゃした髪をロクの股にこすりつけた。

「あたしはロクと一緒に行く」

この言葉はロクの頭のなかに一種の陽光を灯した。彼は口を大きく開け、笑い声をたて、人々に話しかけた、もっとも迅速に移り変わる心中の絵と口から出る言葉とはあまり関係はなかったのだが。フェイは彼に笑いかえし、ヘイは厳粛な微笑を見せていた。

ニルは大声で二人に呼びかけた。

「気をつけるんだよ、リクウ。しっかりつかまってな」

ロクはリクウの捲毛を引っぱった。

「立って」

リクウは彼の手をとり、片方の足で彼の膝をつかみ、背中の毛のところまで攀じのぼった。小さなオアはロクの顎の下で彼女のあたたかい手で抱いた。彼女はロクに叫んだ。

「さあ、いいよ！」

ロクはぶなの木陰の小道まで、まっすぐに戻った。彼は水をにらみ、それを目がけて突進し、そして横にそれて止まった。水の向うで人々が笑いだした。ロクは後ろへ走ってはまた前へ疾走するのだったが、その度ごとに丸木の手前の端で止まってしまう。彼は叫んだ。

「このロクを見ろ、すばらしい跳び手だぞ！」

得意になって躍り出る。が、その得意の鼻っぱしが折られ、彼はうずくまり、こそこそ引っ返す。リクウは背中ではねあがり金切り声をたてていた。

「跳ぶのよ！　跳ぶんだったら！」

彼女は頭を彼の頭にもたせかけて、もう我慢ができぬというように左右に動かした。彼はニルのように、両手を高く空中にあげて、水際に走ってきた。

「ああ、ああっ！」

それを見てマルまでが歯を見せて笑った。リクウの笑いは声も出ず息もつけぬほどになっていて、その両眼からは涙が流れ落ちていた。ロクは一本のぶなの木のかげに隠れたが、ニルはおかしくてたまらず胸を抱える始末であった。と、突然ロクがまた現われた。彼は頭を前に下げ、前方に疾駆した。おそろしい叫び声をあげながら丸木をさっと渡った。彼は跳びあがり乾いた地上に降り、跳んでひとまわりし、はねまわりながら、してやったりと水を嘲る恰好をつづけるので、リクウは彼の頸もとでしゃっくりをはじめるし、一同たがいに抱きあって大笑いである。

やがて人々が静かになるとマルが進み出た。彼はちょっと咳をしてから顔をしかめて一同を見た。

「今度は、マルだ」

彼はバランスをとるために自分の茨の木を横に構えた。そして幹に向かって走りだしたが、その年老いた足はしっかと踏むかと思うと、ふらつくのであった。彼は茨の木を振りながら渡りはじめた。だが無事に渡れるほどの

速さは出せない。彼の顔に苦悶の色が増し、歯をむき出しているのが見てとれた。と、後ろの足がひっかかって幹から樹皮が剝げ露な部分ができた。走りかたが早ければ問題はなかったのだが、他方の足がすべり、彼は前にのめった。斜めにはねあがり、汚ない水が揺れ動くなかに姿を消した。ロクは駆けまわって、できるかぎりの大声で叫んだ。

「マルが水に落ちたあ！」

「ああ、ああっ！」

ヘイは水に踏みこんでいったが、その冷たい異様な触感が気に障って顔をしかめていた。茨の木をつかむと、マルはその他の端を握っていた。でマルの手首をにぎったが、とっさに二人一緒に倒れかけた、組打ちをしているような恰好である。マルは身をふりほどいて四つん這いになり固い地面の方に這いあがっていった。水からあがってぶなの木の背後まで行くと、そこで身を丸くして横たわり慄えていた。一同はまわりをぎっしり取りかこんだ。みんなしゃがんでその身体を彼にこすりつけた。自分たちの腕をまわして、保護慰藉の格子を作った。マルの身体から水が流れ去ってそのあとにところどころ毛がかたまって先が尖っていた。リクウは這うようにして群のなかにもぐりこみ自分の腹を彼のふくらはぎに押しつけた。ただ老婆だけがやはり動かずに待っていた。人人の群はマルのまわりにうずくまって彼の身の戦きを分かち持ったのである。

リクウが口をきいた。

「腹がへった」

人々はマルのまわりのかたまりを解き、彼は立ちあがった。彼はまだ慄えていた。この慄えは皮膚や毛の表面の動きではなくて深みから来ていたから茨の木そのものまで彼とともに揺れるのであった。

「行こう！」

彼は先頭に立って小道を進んだ。このあたりになると木と木の間の場所がひろくなり、その場所に灌木が多く生えている。間もなく一同は大木が枯れる前につくった空閑地に達した。この空閑地は川のすぐ傍にあり、立っている当の木の髑がいまだにあたりを支配している。蔦があとを継いでいて、その深く食いこんだ茎々は親木の幹に静脈瘤のようにもつれからまり、以前に幹が枝をひろげて濃緑の葉の巨大な巣をつくっていたところで終わっている。菌類の生えかたも盛んなもので、突き出た笠に雨水をいっぱいためているのもあれば、もっと小さくて赤と黄のジェリーのような球もあり、もはや親木のほうは崩れて粉末と白い髄になっているのであった。ニルはリクウのために食物を集め、ロクは指でまさぐって白

い甲虫の幼虫を探した。マルは彼らを待っていた。彼の身体はもう始終慄えてはいなかったが、時折痙攣するのであった。ひとしきり痙攣がすむと彼は茨の木に倚りかかったが、まるでそこを辷り落ちなんばかりに見えた。

五官に新しい要素が加わってきている。絶え間のないあたりいっぱいにひびきわたっている音だから、それが何か知らせあう必要もないくらいである。この空閑地の先では土地が急傾斜に高まりはじめ、ところどころに矮小な木々はあるが、大体は土である。しかしここでは地面の骨格が見え、なめらかな灰色の岩の塊があちこちに首をもたげている。この斜面の向うの山と山のあいだに峡間があり、この峡間の落ち口から川は一番高い木の二倍ほどの高さの大きな滝になって落ちている。みんなは黙って遠くから聞こえてくる水の響きに耳を傾けた。そしてたがいに顔を見あわせ、笑いはじめしゃべりはじめるのであった。ロクはリクウに説明した。

「今夜は落ちる水のそばで眠るのだ。あれはなくならなかったからな。覚えているかい」

「水と洞穴の絵を持ってるよ」

ロクは枯木を可愛いというふうに叩いてやり、マルはみんなを率いてのぼっていった。みんな嬉しくてたまらないのだが、それでもマルの身体の弱まりに気をつかった、——もっともそれがどれほど痛切なものかにはまだ気づいていなかったが。マルはまるで泥から引き抜くように脚をもちあげたし、その足も以前のように器用とはいえなかった。踏みおろす場所を不細工にえらびはするが、まるで何かに横ざまに引っぱられるかのように、よろめいて杖にすがるのである。うしろに続く者たちは彼の動作の一々に倣うのだが、こちらは元気いっぱいだから造作もない。マルの苦労しているさまに気を奪われ、みんな愛情にみちた無意識のパロディになるのである。彼が倚りかかり喘ぐと、みんなもまた口を大きく開け、よろめく、足がわざとのように不器用になるのだ。彼らは、灰色の丸石や膝ほどの高さの石などが乱雑に散らばって木の姿はまるで見えない場所を曲がりくねって歩いてゆき、やがて開けた場所に出た。

ここでマルは立ちどまって咳をした、一同は彼のため待たねばならぬと承知している。ロクはリクウの手をとった。

「ごらん！」

斜面は峡間まで延びており、山が眼前に聳えたっている。左手では斜面が断たれ崖をくだって川に落ちている。川のなかには島があるが、これはその一部が直立して滝にもたれかかっているような恰好をしている。川はこの島の両側面に落ちかかっているが、こちらの側面では水が少なく向う側では幅もひろく勢いもはげしい。滝壺の

あたりは飛沫と水煙のために何も見えない。島には林もあり密な藪もあるが、滝に面する端は濃い霧がかかったようにかすんでいて、その両側では川面の輝きも和んでいる。

マルはふたたび歩みはじめた。滝の落ち口にのぼるのには道が二つある。ひとつは右手にジグザグになって岩のあいだを這いあがっている。この道のほうがマルには楽だったろうが、彼は何よりもまず、早く安楽な場所に達したいと熱望しているのだろうか、これは顧みなかった。彼は左手の道をとった。これは崖のふちに生えている小さな藪のなかを縫ってゆくのだが、そのときリクウがまたロクに話しかけた。滝の音で彼女の言葉の肝心なところは消されてしまって、そのかすかな粗描しか残らなかった。

「腹がへった」

ロクは自分の胸をぴしゃっと叩いた。彼はみんなに聞こえるよう大声を出した。

「いっぱい耳（茸のこと）がなっている木をロクが見つける、そういう絵を持っているよ――」

「リクウ、お食べ」

手に漿果を載せてヘイが二人の傍に立った。そして、流しこむようにしてやると、リクウは食物に顔を突きこんで食べるのであった。小さなオアはその腕に抱かれて居心地が悪そうである。食物を見ているとロクも自分の飢じさに気づいた。海辺のじめじめした冬の洞穴を後にし、磯や塩水沼で採れる苦い妙な味のする食物とも別れたとなると、突然さまざまな旨いものの絵を持つのだった、蜂蜜だの木の若芽だの、球根だの甲虫の幼虫だの、とびきり旨い肉だのそれほどでもない肉だのの絵である。彼は石を拾い、まるで虫のいそうな木を叩くように、すぐ横にある裸の岩を叩きはじめた。

ニルは灌木からすがれた漿果をちぎって口に入れた。

「見ろや、ロクが岩を叩いてるぞ！」

みんなが自分を見て笑う。彼は道化てみせ、岩に耳を当て聴くふりをし、大声で言った。

「虫め、起きろ！　目が覚めたか？」

だがマルは頓着せずに先達をしていた。

崖の頂きが多少反りかえっているので、そのぎざぎざの頂きを登りこえずに、川が滝壺の騒がしさから遠ざかったあたりの真上にある切りたった崖っぷちを縫ってゆくことができた。道は一足ごとに高くなって、斜面のところもあるし宙にぶらさがっているような箇所もある、切れ目があるかと思えば突き出ているところもあるといった眼のくらむような径で、足もとが凸凹なのが身を保つ唯一の足がかりであったし、事実彼らが通り抜けた後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com